

## 記者会見報告

日時：2020年10月7日水曜日午後4時30分～5時

場所：厚生労働省記者クラブ

本学会主導の新型コロナウイルス感染症に対する漢方薬の臨床研究に関する記者会見を行った。参加者は、伊藤隆会長、高山真理事、並木隆雄副会長、久永明人常務理事の4名で、マスコミ9社を相手に行った。

先ず久永常務理事より4名が紹介された。

伊藤会長は、学会主導研究の概要について説明した。特に本研究で使用される薬剤名の公表はしばらく控えてもらいたい旨を記者たちへ依頼した。西洋薬の治験と異なり、漢方薬は医療用医薬品あるいは一般用医薬品として使用可能なため、パニック買いや転配目的での買い占めによる薬剤の枯渇や、医師の管理によらないOTC薬の不適切な使用による副作用の多発を防ぐ目的である。

高山真理事は、東北大学においてすでに開始されている、第1研究である感染者への投薬実態調査（後向き症例登録）および第2研究である感染者への治療効果の検討（前向き介入）の2つの多施設共同研究について説明した。

並木隆雄副会長は第3研究である千葉大学等における医療従事者を対象とした発病予防のための多施設共同研究（前向き介入）について説明した。それらの研究の他に、後遺症症例に対する研究も準備中であることが述べられた。

記者より質問があり、対応した。

Q 有効性安全性が証明されれば薬事承認を求めていくのか。

A 通常の承認を目指すのではなく、第2研究はCOVID-19の感冒様症状を対象としたランダム化比較試験であることから、保険適応範囲内の運用になる。

Q Outcomeの内容について教えてもらいたい。

A Primary outcomeは症状の改善であり、secondary outcomeは重症化の予防である。

Q 3番目の医療者に対する研究目的は感染予防か、発病予防か。

A 発病の予防である。

Q 今回この試験薬を選んだ理由は何か。

A 過去のパンデミックを参考に、漢方薬の最近の研究成果を考慮して選択した。

Q 対象が軽症および中等症であるが、途中で重症化した場合はどうするのか。

A その時点で漢方治療は終了となり、患者にとってベストの治療に切り替えて対応する。

活発な質疑がなされ、記者会見を終了した。